

# 東京オリンピック・パラリンピック 招致活動と経済効果



終盤、フランス語を堪能に話することができる滝川クリステルさんが、柔らかな笑顔で日本の心を表現し、次に、2つの銀メダルを持つメダリストの太田雄貴選手が、アスリート目線で東京開催のメリットを強調。次のオリンピックで金メダルを狙っているはずの彼は、2週間練習できない環境に身を置いても、「未来の子ども達のために」とこの招致活動に参加。その熱のこもった言葉は、IOCメンバーの心にも響いたはず。そして最後は安倍晋三首相。「原発は国のコントロール下にある」という力強い言葉は、このプレゼンでなくてはならない言葉でした。

このプレゼンテーションの舞台裏では、彼らを支えていたスタッフを含め、関係者全員が「Share the Pulse（鼓動を分け合う）」という合言葉のもと、一致団結していました。プレゼンメンバーが机の下でしっかりと手を握っていたという話もあるように、彼らが考えていたのは「いい形で次にバドンを渡すこと」。これは日本の駅伝精神につながるものであり、日本人独自の感覚なのではないでしょうか。

最後に付け加えると、公務を逸脱する行為となるため、プレゼンメンバーとしてではなく、ご挨拶という形で登壇された高円宮妃久子様の存在も大きなものでした。高円宮妃久子様は流ちょうなフランス語で、2011年の東日本大震災における被災地支援への感謝の言葉を語られ、実はその後のロビー活動にも積極的に参加していらっしゃいます。世界におけるロイヤルファミリーへの敬愛は非常に大きいもの。その存在そのものが、勝利を引き寄せるひとつの大きな要因となったはず。そして

おおよび必要資金の確保をすることは国の義務である」ということが明記されました。これにより、オリンピック招致は国の仕事となり、真の招致チームが出来上がったと言っても過言ではありません。

また、ふたつ目はプレゼンテーションを行ったメンバー全員が「自分にしか伝えられないメッセージ」を確実に伝えたこと。例えばトップバッター、パラリンピアン佐藤真海選手は、若さあふれるプレゼンでスポーツの力のすばらしさを語り、さらにメンバー紹介では、彼女の口から「内閣総理大臣 安倍晋三(Prime Minister Shinzo Abe)」と紹介。これにより、「若者も首相もみなここでは同等である」という印象が会場に深く刻まれました。続く、竹田恆和招致委員会理事長はIOCメンバーと同等な彼だけが言うことのできる「東京に投票してください」というメッセージを力強くくり返します。さらに、親近感あふれる口調で水野正人招致委員会事務総長が東京開催のコンセプトを伝え、続いて、英語を話することができない猪瀬直樹元都知事が拙いながらも真摯で実直な質疑応答を行う。そして

平成27年1月22日(木)創立50周年式典に先立ち、東京ドームシティホテル「シンシア」会場に於いて、新春セミナーが開催されました。今回ご登壇いただいたのは、2020年「東京オリンピック・パラリンピック」を実現に導いた招致委員会のエグゼクティブプロデューサーである相原正道氏。実際にブエノスアイレスのIOC総会会場にて、「TOKYO」と発表されたときの高揚感を含め、これまでの道のり、招致の舞台裏、そして、なぜ「TOKYO」は今回勝つことができたのかなどを、臨場感あふれる内容で語っていただきました。

## なぜ、東京は勝つことができたのか？

「苦手のロビー活動を克服したから」、また「国内の支持率が70%を超えたから」とよく言われていますが、本当の理由は別のところにあると私は考えています。その理由のひとつが2011年に「スポーツ基本法」が成立したこと。この27条に、「国際競技大会の招致を円滑に進めるべく、社会的気運の醸成



プロフィール  
相原正道

福山大学経済学部経済学科准教授(2012年4月～)  
多摩大学経営情報学部客員准教授(2009年4月～)  
2020年東京オリンピック・パラリンピック招致委員会 エグゼクティブ・プロデューサー  
(2016年同委員会 事務部門マネージャー)

IT系出版社編集部を経て、1998年より電通パブリックリレーションズにおいてリサーチ&プランニング部、営業部などを歴任。  
2006年3月 筑波大学大学院体育研究科修士課程 スポーツ健康システム・マネジメント選考を終了。  
東京ヤクルトスワローズ「F(古田敦也選手兼任監督)プロジェクト」メンバーとなるなど、多方面にて活躍中。

## 東京オリンピックに 向けての5年間

2020年の東京オリンピック前後の経済効果について、東京都は5兆1352億円と試算していますが、竹中平蔵慶大教授が所長を務める森記念財団都市戦略研究所による試算では、約19兆4000億円となっています。ハードとソフト面のあらゆる効果を考えると、これはある程度見込みのある数字だと、私は思います。

また、「世界の都市総合ランキング」を見てみると、毎年、1位NY、2位パリ、3位ロンドン、4位東京と常連国が上位を固めています。しかし2012年、ロンドンはオリンピック効果により1位を獲得。日本は今、これを狙って、産業、観光等の開発を進めているようです。

株価の変動においては、開催決定の時点で一度跳ね上がり、再びオリンピック開催の約1年前から上昇。そして、開催の少し前に頂点を迎え、開催後に緩やかに落ちていくというのがオリンピックサイクルという一般的な変動パターンになります。日本はおそらく、緩やかにこのサイクルにのっとるで

しょう。ただここで注意すべきは、ギリシャやスペインのように、過剰な財政主導で経済危機を招くことのないようにすること。現在は財政主導の金融緩和でうまくバランスを取っている日本ですが、このさじ加減には注意が必要となります。

2020年は、実は国の収支バランスを黒字化するという国際公約目標年でもあります。ここに向けて安倍政権は、オリンピックを3本の矢のひとつ「成長戦略」に組み込み、この効果によって国を活性化させたいと考えているようです。その戦略により、現在、羽田・新宿間の高速道路建設計画が進められるなど、様々な分野で利便性を追求する開発が、猛スピードで進められています。大切な日本の精神も忘れてはいけません。

「世界から見た東京が愛される理由」を見てみると、そこには「正確で安全な鉄道システム」なども挙げられていますが、人気の観光スポットとして、「温泉」「屋形船」「お祭り」など日本の伝統文化も多く選出されています。

1964年の東京オリンピックに合わせて作られた老舗ホテル、ニューオー

タニやホテルオークラが、最近相次いで改装を決定したことは、おそらくみなさんご存じでしょう。この改装は、当時の基準によって作られた部屋の広さなどを改善し、3つ星ホテルから5つ星ホテルになることを目的としています。これこそまさに、「古いものを大切に使う」日本の精神に、「世界スタンダードを取り入れる」という精神が加わった新しい例。世界中の人をもてなすために、「世界基準を目指す」ということは必要なことです。しかしながら、ここに「日本らしさ」がうまく融合してこそ、東京はより「世界に愛される都市」になることができるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、今、オリンピックに向けて、様々なスポーツが技術向上のために努力をしています。その中でも私はぜひ、ボールゲームにがんばってもらいたい。なぜなら、バレーやサッカーなどの試合では、観客が「がんばれニッポン！」と応援することができるからです。これは個人競技にはない、良さのひとつ。「がんばれニッポン！」日本人みんなが、高らかにそう声援を送ることのできる東京オリンピックの実現を、心から願っています。

